103 これでいいのかも知れない・・・・・・・・・・452

あの人が僕の方に視線を向けるまで、
僕はあの人を見つめて、
あの人がこちらを見るのを待った。
しかし、あの人が僕の方を見ると、
僕はそのまま目をそらして、素通りした。
それをいつも僕は後悔した。

通学時、帰宅時に、あの人と会うのは、
朝の三条京阪のバス停付近がほとんどだった。

四月がすぎ、太陽がまぶしい五月になった。

京阪電車は、毎朝、通勤通学の人で満員。
僕はそんな中、電車の中から風景を楽しんだ。

水鳥が舞い、のどかな鴨川が
電車の左窓から見えた。
一方、右側には、深い緑色の水を
たっぷりと抱いた疏水が見えた。
疏水の水は、いつも、すごい速く、
黙々と不気味に流れていた。

三条京阪についた時に、
あの人に会えることを期待しながら、
僕は、いつも、京阪電車の窓から、
七条から三条まで、その美しい鴨川と、
不気味な疏水の風景を楽しんだ。

いつも、僕の頭には、あの人のことがあった。